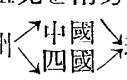
西日本海海岸に於ける蝶類分布の特異性

鳥　居　正　名

西日本海岸，即ち中國地方の日本海々岸地方及その接壌地に於ける蝶類分布が極めて特異な狀況を呈してゐる事は余り先進者の注意をひかなかつたらしくあまり之に關した議論は見られない.

西日本海々岸は如何なる特異性を持つてゐるか，—— 先づ第一にあげらるべきものは朝鮮半島に分布して居り，九州には分布せず，しかるに日本海々岸→近畿地方へと分布してゐるキマダラルリツバメ，次にあげられるのは，同じく九州には分布せず，中國・近畿兩地方の一部に分布するウスイロヘウモンモドキ，叉朝鮮に分布し，本州中部に分布するが同じ本州でありながら隔離されて大山に殘存的に分布を示すゴマシジミ・朝鮮・九州・中國に分布するテフセンシロテフ等特異な分布を示す例があげられる.

しかもこの內キマダラルリツバメとウスイロヘウモンモドキは分布地に似て居り分布線も相似であるにかゝはらず，前者は南方の系統であり．後者は北方の系統であるといふ相反した現象なのである．しかも一海峽をはさみ一方には多產し一方には稀に產するといふ人爲的分布に似たテフセンシロテフの樣に稀でなく比較的兩種共多數に採集されてゐるのである.

こゝに最も特異な關係にあり，本文の題目である西日本海岸の分布特異性を示す所のキマダラルリツバメ及び，ウスイロヘウモンモドキの兩種に就て研究の步を進めて行く事とする.

地質學者の說く所によれば，朝鮮九州は近時迄接續してゐたものの樣であるが，こゝに生物學的に疑問を起させるのは近時迄九州朝鮮間が接續して居たならば當然現在朝鮮に分布し，本州（九州北部と同じ氣候條件にある.）にも分布してゐる兩種が九州にも分布してもよいはずである．しかるに前揭2種を見るに朝鮮に分布し九州に分布せず，はるか隔つた本州の大山附近から東へ向ひ日本海々岸中國山地・丹波高原に分布してゐるのは如何に解釋すべきであらうか.

兩種の特異的分布を巡つて日本列島の構成を考へて見よう.

キマダラルツバメの近緣種は臺灣・支那・佛印等に多數見られるから，當然キマダラルリツバメは祖先を南方に持つ種である事はたしかである現在のキマダラルリツバメが臺灣→琉球→九州↗中國↘／↘四國↗近畿と分布したのでない事は全く中間地帶（九州，四國，琉球等）に全く分布を見ぬ事を以て明らかである．更にキマダラルリツバメは海峽を渡る事の比較的少い種であると云へる.

ひるがへつてウスイロヘウモンドキの分布を考察するに，山地のみに分布し，比較的活動力のない所から見るとどても海峽を渡る事は不可能で山地に殘存的分布を示す所から推してキマダラルリツバメより比較的以前に分布して來たものと思はれる．

兩種て渡洋性のない所から見て現在各分布地は，過ぎし時代に於て陸續きであつた筈である．又ウスイロヘウモンモドキがキマダラルリツバメより以前に來たといふ事は，キマダラルリツバメの北進を支那，朝鮮方面に之をはゞむ可き現象があつたものと考へられる．

即ちウスイロヘウモンモドキは寒冷期に於て南下し，本州に到來し，キマダラルリツバメは寒冷期がすぎると猛烈な勢で支那大陸より朝鮮半島へ，更に本州へと分布して來たものと思はれる．

では地質學者の說く朝鮮・九州の接續は如何になるか？　生物學上より考察して以上の如く推察される所から，朝鮮・九州間は寒冷期の來る以前に既に沈降して海となり，それに反して中國地方・朝鮮地方間が陸續きであつたものと考察出來る．これが事實であるか否か，今後地質學研究家の研究をまたねばならない．

以上雜然と述べて來たが現在の西日本海々岸の蝶類分布の特異性をめぐり，少しく西日本構成の地史の一端を考察して見た．

西日本海岸→朝鮮海峽沿岸にかけて未だ不思議な分布が見られるが，之等は今後稿を改めて書く事として，今回はキマダラルリツバメとウスイロヘウモンモドキを巡つて特異の一端を考察して見たのであるが，今後この方面の問題について何らかの參考ともなれば幸之にすぎるものはない．　(昭. 20-8-19)

ウラキンシジミの新産地

本年6月25日ヒメヒカゲ採集の爲，京都府半國山へ出掛けた時はからずもウラキンシジミ♀1頭を採集した．當地は能勢妙見山にも近く，京都府長老ヶ岳よりも記錄があるから，産するのも當然と思ふが珍らしいから御知らせする．　(鳥居正名)